

8月



(信州爆水 RUN in 依田川オフィシャルサイトより)



あの日のあの川 リレー日記 ～第19話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第19話主人公 平尾真菜

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：福岡県遠賀川)

「苦い思い出」

いつのこと？：22歳の夏

どこの川？：依田川

インドア派の両親の元に生まれた私は、なぜかアウトドア志向に育ってしまった。小さい頃から、登山や川遊び、キャンプ等に憧れを抱いていたが、両親が連れて行ってくれるわけもなく、自然遊びへの憧れを抱いたまま、成長した。高校生になり、ふとしたきっかけで、筑波大学のオープンキャンパスに赴いた。緑に囲まれたキャンパス、大学の中を流れる小さな川(通称：天の川)、自然豊かな環境に一目ぼれし、筑波大学を志望校とした。大学を流れる天の川は、一番身近な川ではあるが、今回思い出として語らせていただく川はそれではない。大学3年の夏に出会った依田川である。私の大学では、3年生から、ゼミに所属するのだが、私は『川と人』ゼミという何とも興味深いゼミに入った。そこで、ゼミの先輩から聞かされたのである。「川の中を走るマラソンがあるけんね。」そう、それが『信州爆水 RUN in 依田川』である。軽い気持ちでエントリーした爆水 RUN。これが、私の一生忘れられないであろう思い出となった。

2015年8月某日、その日はやってきた。走行距離8km。コースは川の中と河川敷。安全面を考慮して、水深が深い箇所はコースから(おそらく)除外されている。「3、2、1、GO！」スタート合図とともに駆けだすゼミ生の後を必死についていくも、スタート地点の校庭から数十m離れた川に着くまでの間で、大きく引き離された。道路から河川敷へ、そして河川敷から依田川の中に「ばしゃんっ！」と足を踏み入れた時の爽快感は今でも鮮明に覚えている。「ああ！小さいころからずっと私が求めていたもの！この感覚が欲しかった！楽しい！将来、結婚して子どもに恵まれたら絶対にキャンプに連れていこう！ああ！川は素敵だ！自然は偉大だ！」そうメルヘン気分で走っているところに悪魔はやってきた。一瞬の出来事であった。足を何者かに引っ張られたのではないか、と思う程に勢いよく自分の身体が下に沈んだのである。ひざの高さだった水面は、口元に達した。足は川底に届かない。こんなに深い箇所があるとは聞いていなかった。パニックになりながらも、腕を天に向けて大きく伸ばし、助けを求めると、傍を泳いでいたランナーが即座に助けてくれた。見ず知らずの命の恩人にしがみ付き、放心状態の私に、彼は言った。「安心してください。落ち着いてください。そんなに深くはないですよ。」そっと彼から離れ、川底に足を伸ばす。届くではないか。水深も腰の高さだった。川の流れの速さに私の身体は斜めに倒れ、そして溺れていたのである。「少しの水で溺れる。」これまで何度か耳にしていたその言葉を思い出した。僅か10センチの水深であっても溺れる時は溺れるし、ましてやそれが腰の高さであれば当然のことである。私は川の脅威を強く思い知らされた。その後は、できる限り河川敷を選び、何とかゴールにまでたどり着いた。

1年が経ち、今年も爆水RUNの季節がやって来た。去年怖い思いをしたけれど、それ以上に楽しさの方が勝り、今年もエントリーした。もちろん、川の脅威を忘れてはいない。今年はライフジャケットを身に着けて挑むことにする。ここ数ヶ月、近所の市民プールで泳ぎの練習もしている。安全第一。全国の川ガール・川ボーイも、必ずライフジャケットを身に着け、そして川へ繰り出そう。

(次は菊地康佑さんにバトンを託します)